

このたび「日本登山医学研究会」が発足し、その第一回学術集会が、北博正東京医科歯科大学名誉教授を会長に、昭和五十六年七月五日、東京慈恵会医科大学高木会館七階講堂において、約六十名の参加者を得て盛大に催された。そのことを日本山岳会の会員各位にご報告申し上げると共に、「登山のための医学」に興味をお持ちの方は、医療関係者であるなしを問わず、こぞこの研究会にご入会下さるようお願いする次第である。

学術集会の内容は文末にそのプログラムを写しを付記しておくのでご参考にして頂くとして、集会の模様を少しお伝えしてみたい。講演内容はいずれも平易、具体的、実際の興味深く、次からの

「日本登山医学研究会」の 発足にあたって

中 島 道 郎

登山にすぐに役に立つようなお話であった。フロアからの質問も活発で、特に医師でない一般登山家からの質問が多く、これからの登山医学研究の方向を示唆するところ多大であると感じられた。演者も聴衆も共に登山愛好家であった

めか、場内は終始和やかな空気に包まれており、通常の医学研究会には見られないような、気持のよい雰囲気であった。最後に第2回集会是京都で、第三回集会是松本で催されることに話が決って、この会は閉じられた。

今回の演題は高所医学に偏していたが、それは準備期間が短かったので、演題募集の範囲を高所医学関係者に限ってしまったせいであって、本来はもっと広く、登山

に関係する医学分野全般にわたった演題を期待していたものである。第二回目以降は高所登山関係のものばかりでなく、例えば、多くの医大による山の診療所の活動の様子とか、集団登山に随行した医療担当者の体験談などが寄せられるよう希望している。

何故今になって「登山医学」かについては一寸触れておきたい。あれは昭和四十一年から四十二年であったと思うが、吉村寿人、高木健太郎、北博正といった先生方が、高地で催される、来たるべきメキシコオリンピックに備えて、日本における高所生理学的知識を発展、普及させる目的で、日本生気象学会の中に「高所医学研究班」を設けられた。その当時の社会的要請によって、高地での体力医学的、スポーツ医学的関心は高く、先生方の目論みは一応成功であったという事は出来る。しかしこのよ

GOING HIGH THE STORY OF MAN AND ALTITUDE BY CHARLES S. ROBERTS, M.D.



研究会で使用した資料の表紙

に関係する医学分野全般にわたった演題を期待していたものである。第二回目以降は高所登山関係のものばかりでなく、例えば、多くの医大による山の診療所の活動の様子とか、集団登山に随行した医療担当者の体験談などが寄せられるよう希望している。

山をきれいに「三」は持ち帰ろう

うなアカデミックな行き方は、登山界にとってはあまり役に立たなかった。高所登山に関する医学的研究発表を行なっても聴衆に登山家はいなかった。ひどいことになる、発表者をまともな研究者と遇してくれない学会もあった。筆者はこの時、何としても発表者も聴衆も共に登山関係者から成る、登山のための医学研究会を作り上げねばならないと痛感した。以来十年、ことあるごとにそのことを訴え続けて、このたびやっと日本山岳会医療委員会(の肝入りで実現の運びとなった。機運が熟するまでにそれだけかかったのである。本研究会の発足にあたっては大森薫雄、山本良三両委員の奔走が力あって大きい。深く感謝する次第である。確かに本研究会は日本山岳会医療委員会を母体として生れた会ではあるが、本研究会を日本山岳会の下部組織と考えないで欲しい。一応別個のものとして、しかし、本研究会の活動は即日本山岳会会員各位の登山の安全に直接かわっているとの認識の上に立つて、会として全面的に応援して頂きたい。そして医療委員会の仕事の中に、本研究会に対する支援と



1981年(昭和56年)

9月号(No. 435)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目 次

- 「日本登山医学研究会」の発足にあたって 中島道郎……………(1)
- 海外の山では……………(2)
- 第九回山岳史懇談会から—
- 三田幸夫氏にきく大正時代の積雪期登山……………(3)
- 図書紹介……………(4)
- 「Kangchenjunga 8598 m」「私の山、谷川岳」「登山・それは愛」……………(6)
- 自然保護……………(6)
- 国際山岳会(IMS)創立……………(6)
- 東西南北……………(6)
- マウント・ウィルヘルム登頂記：メスナーに会いに：山里寿男 個展開催 海外連絡委員会より……………(8)
- グリーンランドへ行くには 未踏の東壁—米國エベレスト遠征—1981 追悼 吉阪隆正氏を偲ぶ……………(9)
- おねがい 図書委員会……………(10)
- お知らせ 静岡支部：自然保護委……………(10)
- 報告 海外連絡委員会……………(10)
- ルーム日誌・会員移動……………(10)
- カット／芳野満彦

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

留守番電話(電話番号24-六六五九)

いう項目を加えて頂きたい、というのが本研究会発足にあたっての発起人の一人としての筆者の希望である。

例えば、日本における登山人口は数百万をかぞえ、海外高山に旅する人も年間数千人に達するようになった現在でも、高所登山のための医学知識は勿論、登山のための医学知識全般にわたっての国民的知識レベルは決して高くはない。数ある医大の中で、この件に関して学生に講義出来る人材は極めて少ない。またヒマラヤを体験している医師の数も全国では数百人になると思われるが、誰がどのような体験をしたかということを発表し、意見を交換し合う場が日本では全く存在していなかった。新しく山へ登ろうとする人は全く手探りで知識を仕入れ、登って帰って来るとそれだけで、折角の努力も知識も埋もれてしまう。これは国民的エネルギーの莫大な損失と言わねばならない。ここで先人がその努力の経過と結果を報告し、後人はその成果を踏まえて更に新しい知見をつけ加えるということを繰返してゆくならば、日本における登山のための医学のレベルは少しずつアップされて行くことになるであろう。ここにそれを期待しつつ、日本山岳协会会员各位の、本研究会に対する絶大なご理解とご支援をお願いする次第である。

第一回日本登山医学研究会プログラム(写)

○開会の辞 大森薫雄 赤松功也

①登山医学の史的回顧 北 博正

②最近の登山医学関係図書 中島道郎

③高所環境の脳機能に及ぼす影響 大森薫雄 田中壮佑

④精神医学の立場から見た高所医学について 川久保芳彦

⑤チョモランマのEKG 古原和美

⑥東京医大エベレスト高山医学研究所の活動 金子 宏

⑦凍傷の治療 長尾悌夫

⑧高地肺水腫の二例 中島道郎

⑨ランタンリルンにおける高所肺水腫例 福島雅夫

⑩高山医学研究チームによる高山病発生予防の研究 長尾悌夫

⑪ヒマラヤ登山中の胸部線像と心電図 本山十三生

⑫ヘマトクリットの増加と右心室肥大ならびに低圧耐性との関係 酒井秋男

⑬極地における環境の呼吸機能に及ぼす影響 斎藤惇生

⑭ガネシュヒマールにおける生理 関口令安

海外の山では……

八一年前半の日本隊の海外登山は、ヒマラヤの冬季登山とアルパインスタイル導入により、新たななびがりの方向が示され、また昨年オーブンされた中国内山城の開拓が目ざされる。

ポーランドのアンジエ・ザワダが先鞭をつけた冬季登山(ネパールは昨年十二月一日〜今年二月十五日)は植村直己隊のエベレスト南東稜と坂下直枝の単独、無酸素アンナプルナ主峰の八千級級の活動、北大隊のバルンツェ登山がある(英エベレスト西稜アララン・ラウス隊長ら十一人など、同季計七隊)。北大隊は十二月十五日登頂したが、クリスマス前後を境として襲った偏西風の吹き出し以前に機をつかんでおり、同季の各隊とも偏西風の作戦的な対処法を今後の課題とした。北大、名大水圏科学研究所隊にはヒマラヤの冬季気象の長期観測があり、今回も自己記録計による観測がなされている。



カット/芳野満彦

ブレに入って、単独、無酸素のジャイアンツ行として、禿博信が六日間で果したダウラギリ主峰北東稜登頂(六月二日)が際立っている。原真の高山研究所で、低圧タンクを利用した、即製高処順化「トレーニング」に入り、三年間継続的にワスカラン、マッキンレー南峰、アコンカガ南壁の实地登山による順化経験を積み上げていた。三日間で、モンスーン期にエベレスト北東稜を登頂したメスナーのスピードには及ばないが、この種の登法の日本での先鞭としての意義は大きい。この低圧タンク

で、労山の三上順本が八千級までの経験(四日間)を持って、チョー・オユーに挑んだ。が、BCへの七日目でダウン(登山の後半は快ペース)。「オーバーペースでした」(三上)。個人差もあり、また低圧訓練による心理的、肉体的過信は禁物であることも証した。

ネパールには、日本の十隊を含め十四カ国三十四隊と最多。日本隊の八千級は、禿のダ主峰に、日本ヒマラヤ協会のカンチェンジュンガと同西峰の同時登頂がある。明大単独のエベレスト西稜は八七五〇で時間切れとなったが、十三人の八千級経験者を生み、あすにつなげた。

同隊の総指揮交野武一(七三)は、三十二日間のBC(五三五〇)で滞在記録を、またマナスル東稜経由登頂の西独隊アンドレアス・ロフフェラーは六十二歳で、八千級の最長老となった。

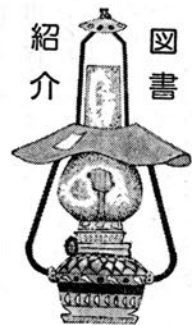
全国土の十分の一、約百万平方の四千以上の山城をかかえる中国内登山は開禁二年目で、各国から三十数隊を迎える。わが国の春季登山は田部井淳子のシシャパンマと、上越山岳協会のアムネマチン。田部井は、七五年のエベレストと合わせて世界初の二つの

女性八千級サミッター。幻の山「アムネマチン」は上越隊によって六二八二を初めて実踏した。中国隊が六〇年に登頂したといわれていたが、史占春が来日の際、隣接峰と間違っていたことを発表している。また前号紹介の英クングール初登頂のほか、同志社大・京都府日中友好協会隊はスークニャン峰(六二五〇)、四姑娘山、四川省)に初登した。(敬称略)

(片山全平)

のは立山、剣であった。しかし、当時雪にうずもれている時期の、あの辺の状況を知っている者は誰もいなかった。

先ず僕達が剣に登るにはどうしたらよいかということを考えた。そして、弥陀ヶ原に登るにはどうしたらよいか、もし室堂に泊れるならば、非常によい根拠地になるので、室堂に達することを考えねばならなかった。麓の芦峠で調べたところ、スキーで弥陀ヶ原を急登することは困難であろうということであった。そこで、安全で登り易い立山温泉から松尾峠を経由するルートで、弥陀ヶ原の上の鏡石に出て最初の露営をした。雪の上での露営も大きな課題であった。連れてきた芦峠の猟師たちは、露営の方法も巧みであり、彼ら独特の冬の装備を使って上手な露営をやった。なかでも彼らは、雪のなかでも焚火をすることがきわめて上手であった。焚火がどんなに燃えるにしたがって、下の雪が融けて沈んでゆき、背中の壁が高くなって大きな穴となる。このため風を防ぎ、寒さを感じさせないようになり、上手な露営をやるものだと感心した。



Kangchenjunga

8,586 m

—カンチエンジュンガ北壁・無酸素登頂の記録一九八〇—

「一九五六年、横有恒氏の日本人初の八〇〇〇メートル峰マナスル登頂から二十数年間、八〇〇〇メートル以上では酸素を吸わぬと危険そのもの」という、発展性の全くない常識が完全に定着していたことに改めて驚いてしまう」

こう記している小西政継隊長が、一九七八年春期ラインホルト・メスナー、ペーター・ハーペラーの南東稜からのエベレスト無酸素登頂を契機として、世界の第一線クライマーの目指すところとなった、高峰への無酸素登山の舞台を、北壁からのカンチエンジュンガとし、隊長以下七名、サーダー、アン・プルバ以下十七名のシェルパが頂を追い求め、見事に成功した記録である。

一九七六年春期、ジャヌー北壁で困難な壁を体験し、解決した山学同志会は、そのヒマラヤ

のきびしさのなかで自らを鍛えた隊員を中核に選び、素晴らしいシェルパと、天候にもめぐまれて、あぶなげなく高峰の頂に立っている。しかしその裏には、自らも無酸素で登頂した坂野俊孝ドクターの「今回の無酸素登山成功の要因—高所順応について」にもあるように、八〇〇〇メートル近くの困難な登攀の経験あるメンバーが、細心なる高所順応の末に頂に達したことがうかがわれるのである。ドクターは「八〇〇〇メートルの順応については、今後多くの試行錯誤によって、次第に解決される問題だろう」とむすんでいる。

内容は第一部として五月十四日第一次登頂者 深田良一、川村晴一、坂下直枝、鈴木昇己、アン・プルバ、五月十七日第二次登頂者 大宮求、坂野俊孝、ペンバ・ツェリン、ダワ・ノルブの日本人隊員各氏による「登頂記」。第二部として「七人の手記」がある。これは隊員六名のBCからC4への「ルートワーク記」と隊長の「カンチエンジュンガ北壁へ」で、冒頭の主題が展開されている。第三部として二月十一日のカトマンズ出発から三月二十日のパンプマBCまでの「キャラバン日記」を報道の磯川道夫氏書いている。ほかに資料編として、前記ドクターの所論(隊員と登頂した三人のシエマ

パの行動表)、鈴木氏の「無酸素登山の歴史」、隊長の「カンチエンジュンガ登攀史」、坂下氏の「登山許可取得までのこと(登山許可証)」、川村氏の「装備」、鈴木氏の「食糧」、それに隊員とシェルパ、リエゾンオフィサーの紹介、詳細なルート図、和英文の山学同志会これまでの海外登山、遠征カレンダー、協力者一覧、英文の遠征レポート等がある。

カラー四頁、本文に組込まれた白黒写真も、全頁アート紙のためなかなか美しい。(石坂昭二郎)

B5版 本文一二四頁 昭和五十五年九月三十日 山学同志会カンチエンジュンガ登山隊刊 定価一五〇〇円

私の山、谷川岳

杉本光作著

僕にも谷川岳に憧れ、ひかれて足繁く通った時代があった。僕は若く、血気にはやっていたが、それでもいつも楽しく登れるわけがなく、時々には心理的に谷川岳に敗れて逃げた時もあった。そんな時にこの一の倉の開拓者として、昭和の初めに未知の谷に入り、一の倉の各ルートを登った登山家連は僕にとって神様の存在であり、その人達は何十年も前にこの谷を登ったと思えば、僕にも力が出るのである。

った。そしてこの人達がどんな気持ちでそれらのルートを登ったのか、この本を得て始めて知ることができた思いだ。この本を読んで杉本氏は鉄の意志の人間でなく、仲間との遭難にあり、悩み、山行と生活に悩んだことを知り、親しみを感じた。

稀有のクライマーである杉本氏の最初の山行が日光男体山であるというのも面白い、そこで山の良さというものを知り、だんだんに岩登りへと傾倒していった過程が良く描かれている。そして昭和五、六年のころ既に夜行のスキー列車が走っていたという事実や、それを利用したスキー散策から谷川岳夜行日帰り登山の発祥を見る思いがする。

氏はこの中で地元の人達との交流を大事にして、氏の人間味の一端を窺わせる。

また、細かい日時、食事の献立、物価についても実に詳細にわたる記述があり、メモ、記憶力の確かさに感心させられた。

氏にとって始めての谷川岳が西黒沢から一の倉岳の往復で、頂上直下の雪田の冷たい水を飲み過ぎて下痢をし、見知らぬ人のテントに泊めてもらおう等、杉本氏らしからぬ、とほほえましい。

この本の中では特に「わらじ

ある。ちょうどその頃スキーの転換期であって、僕達ははじめて同杖を使った。また締具は、新しいタイプのフィットフルト式のものを使用した。一ノ越にスキーをデボして立山の雄山に登った。はじめてスキーを使用して登ったことに、大いに感激したものである。

僕達は剣に登るときは、スキーは邪魔であると考え、早くて楽な輪かんじきを使用した。地獄谷から輪かんじきをはいて乗越しを直登した。しかし朝暗いうちにでて、剣に登って室堂に帰ったのは夜の九時であった。

山道具のこと

その時分の装備、道具類は新しいものばかりであった。僕達は一ノ越から上は、シュタイグアイゼンをはいて登った。当時シュタイグアイゼンは、スイスから輸入されはじめたばかりで、まだこれを使用して登るといふようなことは殆んどなかった。学校の山岳部ではじめてそれを見て、どのくらい力があるのだろうかということ、長い机をはずにして、そのうえを上り下りして試し、興奮したものであった。ザイルについては、横さんがアイガーから帰ってきた。僕達は当初、船具屋から帆船で使う麻縄を買ってきて使っていた。横さんが、英国山岳会の証明付きの良いザイルがイギリスにあるというので、早速それを取り

と脚絆」の項が面白い。そこでは実践的クライマーと観山家についての論議がなされており、そっくり今の登山界に当てはまる。また、「谷川岳」刊行の余話「実業登山家」として蔑視されていた若手クライマー達の意気を示している。

そのような中で、会員や仲間の死に際して、リーダーでもあった氏の「山から引退するの、一つの責任の取り方かとも思われたが、再び冬山を続けた。その当否は後世の登山者が決めてくれるものと思つて今日に至っている」という氏の述懐には私としても非常に共鳴するところがあった。また「山口清秀氏の登山信条は何よりもパーティの安全にあった」という個所にもとても共感を覚えた。

五十年來の山のパートナーであった山口清秀氏が初めての自著「路跡」を手になさることなく

よせた。買いたての新しいのは硬いので、横さんが柔らかくしなればならないということ、校庭の銀杏の木などに巻きつけて、こすってだんだん柔らかくしたものだ。

寝袋については、当初は薄っぺらな防水布でつくったものを使っていた。そのうちに、横浜の場末の密猟者からトナカイの生皮を買ってきてテント屋に作らせた。重

亡くなられたが、杉本氏もまた、初めての著書であるこの本のあとがきを書かれて一週間後に亡くなられ、同じく本の完成を見られなかったのは何という因縁であろうか。

(雨宮 節)

中央公論社 昭和五十六年四月
十日発行 三五三頁 定価一四〇〇円

登山・それは愛

塚本圭一著

前著「K2より愛をこめて」で007の模倣にしても、日本的発想を越えた書名は、いささかのセンセーションをまきおこした。だからというわけでもあるまいが、この日本語では歯の浮くような表現を、あえて本書の題名にとりいれ、日頃の登山個人論、団体登山論、パーティ学などを柱に、「なぜ登山は愛」なのか? を、豊富な事例を引きながら、七章に

くつかさばるが、ほかに替わるものがないので雪山でも使うようになった。なめしが充分でなかったために、非常に臭いのは閉口した。靴はスイスから登山靴を取り寄せ、それを解体して縫い方などを研究し、本郷の靴屋につくらせた。当時冬山の状態をよく知らないで、信州や越中の猟師たちを道案内に連れていった。僕達はスキー、彼らは輪かんじきであつ

わたつてうまくまとめている。

ことほどさように、著者は蔵書家だけではなく、読書家であり、学習の成果をいつも記憶の引き出しに整理して、リスト・アップの上、ノートされているようだ。

ところで、本書のI～IIIは、登山における愛と自由、自然と登山者について、カフカズやカラコルムの経験を書きつけながら、わかりやすく自論を展開していく。

IV「山での死と敗退」と、VI「山と人」は、対をなすもので、登山家論であろう。以上、やや堅苦しい前半の後に、かつて「岳人」誌上に連載された「自然との対話」を、「山の学校」と改題、補筆されたV章は、息ぬきのエッセイとして、読者には本書のオアシスの価値がみとめられる。

ここまでは、常日頃の持論を推敲したものだけに、理路整然としている。けれども、おそらく中国登山に触れた最初の単行本で、期

た。下りは、スキーは輪かんじきとは比べものにならないほど速い。立山に登ったときなど、一ノ越から露营地まで実に楽しい滑降であった。これを見ていた人夫衆は非常に驚き、自分らもやってみようというので、剣に登って芦峠に下りたとき、われわれの使用したスキーを五台とも芦峠の部落へ寄付してきた。芦峠ではこれを小学校で教えたり、これを見て手製

待のVII「コングール山で考えたこと」は、あくまで一九八〇年先遣隊隊長の個人的手記(紀行)の範囲におさえてあり、最新情報に欠けるうらみがある。「日本コングール登山隊一九八〇先遣隊報告書」(昭和55年9月/京都カラコルム・クラブ発行)に遠慮してのことからか、不案内な読者のために、概念図や写真などもっと豊富に入れてほしかった。

人名の誤記、奇妙な誤植以上に、このユニークな表題と内容が、あまりにも通俗的表紙と装幀に仕立てられたこと、著者にとっても遺憾にちがいない。だが、本書こそ「開けてみれば愛」なのである。

(阿部恒夫)

東京新聞出版局 一九八一年
四月発行 B6判 二五三頁
定価一四〇〇円

図書紹介

のスキーを作り、多くの人がスキーをするようになった。

装備、その他の点で大変苦労したが、その代わりに、非常に面白い経験もした。そのような経験が今でも役に立って、いろいろな場合にぶつかっても困らないこともあるし、便利することもよくある。そして夏は想像もできなかったような、雪の日本アルプスのよい思い出を沢山得ることができ

たわけです。

板倉、大島のこと(質問に答えて)

板倉はスキーの名人で神様みたいなものであった。札幌に板倉ありと言われていた。それがある日、僕達の山岳部の部屋へやってきた。お互いに名前は「山とスキー」誌上などで知っていた。彼は先に槍に行っていたので、その話を聞きたかったし、東京へ来たらぜひ寄ってくれるよう伝えてあった。着物を着て、よれよれの袴をはいて、小さなハンチングをちょこんとかぶって、まるでどこかの小僧みたいであった。話しているうちに、槍の穂先では雪が凍っていて、ピッケルが曲ったという話でみんな興奮したものだ。大島もすっかり喜んでいて。

大島の文章だけしか知らない人は、文学青年的な人と思っているが全然違う。野性的で乱暴で、紳士的ではなかった。小学校は越中であつたが、非常に飾り気のない下町っ子といったところがあつた。酒もあまり飲まないし、煙草も吸わなかった。近視であつたので眼鏡をかけており、われわれの仲間では秀才のほうであつた。身体がずんぐりしていて大きく、目が小さかったので、学校では一時熊というあだ名があつた。ボートの選手などとしていた。

* 懇談会終了後、三田氏を囲んでの二次会となった。翌日満八十一

歳の誕生日を迎えられるという三田氏は、早速多くの人達から、祝福の乾杯を受けられていた。そして、山岳部時代、部の連中と一緒に覚えたという部の歌「守れ権現」について、その由来を説明されたあと、自から美声で歌ってくださった。

三田氏は「わが登高行」の序文のなかで「日本アルプスの草鞋・脚絆時代の末期から、積雪期登山の爛熟期にいたる数年間がもっとも幸せな一時期だった」と回想しておられる。

三田氏の歌声に耳を傾けていると、近代アルビニズムの波がひたひたと押し寄せていた時代の、涸沢の岩小屋から、雪の露営から、焚火を囲む輪からの、三田氏たちの尽きない青春讃歌が伝わってくるような感じがした。

(記録・松家 晋)

出席者・順不同 山村正光、越田和男、島田 翼、砂田定夫、斎藤 桂、石川治郎、泉 久恵、原謙一、中村小一郎、菅野弘章、滝川 清、平山武志、伊藤文三、松本恒廣、鳴原啓佑、山崎安治、久保孝一郎、松下 肇、田辺主計、河村栄二、野田憲一郎、岩瀬皓祐、折井健一、岡沢祐吉、織田沢美知子、鈴木邦之、近藤信行、近藤緑、和久井正明、和久井勝美、牧潤一、浅野孝一、田口二郎、関根幸次、板倉勝正、武田満子、松家晋。



マウント・

ウィルヘルム登頂記

脇坂 順一

この山には年間三〇〇名くらい

自然保護

国際山岳会 (IMS) 創立

— 山を守る運動を登山家と科学者の手で —

田中 薫

昨夏日本で行われた第二十四回国際地理学会 (IGC) に出席した米国コロラド大学教授アイヴス博士が自然保全に熱心な登山家の仲間会いたいとのことで、IGC日本側事務局長の吉野正敏教授 (筑波大・地球科学) と打合せの上、日本山岳会、日本山岳協会、日本自然保護協会等の知友にお知らせしようとしたが、学会の日程上、実現しなかった。同氏については当時朝日新聞 (9/4、9/16) が「荒廃するヒマラヤ」「開発の害にメス」の見出しで、国際山岳会の発足を報じた。

今年四月、同氏からの私信によれば同会結成の準備が成り、機関誌も五月末には出るの、日本山岳会員のご協力を得たく、「山」で紹介してほしいとのことなので、会の趣意書に基づきその概要をご紹介します。

(1) 問題の所在

登頂するらしいが、主としてオーストラリア、ニュージーランドの人達で、次いでドイツやオランダの人が多く日本人はごく稀の由。福岡からポートモレスビー (パプア・ニューギニアの首都) まで空路六時間十五分。時差が一時間ある。なお、パプア・ニューギニアは人口二八〇万、七〇〇くらいに部族が住んでいて約五〇〇の言葉が話されているとのである。五月二日九時ポートモレスビー発。ゴロカまで空路五十分。次い

で十七人乗りのチャーター機に乗り換え、三十分足らずでケグルスグ (二五九九) 着。ここで十二名のポーターを雇い、一同サブリエックのみの軽装でピウンデ湖畔の山小屋 (三五六〇) へ向かう。ポーター達は裸足で二〇キロくらいの荷物を運んで登るのだが足取りは早い。ジャングルには湿地状の道が多く、うっかりすると靴ごと泥濘に引き込まれてしまふ。熱帯性の鬱蒼とした樹林が続き、道は荒れ果てておりところへ

過密人口、自然資源の誤った管理—森林の皆伐・観光の放任などによる山地の乱用は人類の生存をおびやかす。山はおよそ4億人の生命と生態系を支え、山麓に住む無数の人類の生活環境を守っている。本会の言う「山」は高原・低山・傾斜面をも広く意味する。問題を解決するには科学知識に基づく責任ある行政・管理を必要とする。これがため研究者・設計者・山地居住者が手を携えて山の荒廃を告発し、理性的で真に経済的でなお生態的な管理を施さねばならない。

(2) 本会の目的

本会は International Mountain Society と称し米国コロラド州の非営利法人として登録され、次のことを行う。(A) 山岳地域の土地と住民の保護、自然資源の理性的利用、(B) 山の世界に通ずる基礎的・応用的な各分野にわたる調査研究の助成、(C) 山地利用の問題を解決する知識の普及と適用、(D) これがため世界を通じて研究センター、国立研究機構の設立をうながす。具体的には国連大学の協力のもとに機関誌を刊行する。次いで山岳地を研究する団体のリストを作



ピウデ湖畔のコマニムプロ小屋

どこに古木が倒れて道をふさいでいる。樹木は次第に矮小化し、道は相も変わらず湿原で膝から下は泥んことなり、靴の中まで浸水したままピウデ湖畔のコマニムプロ小屋に着く。

この小屋は一九六五年の夏にオーストラリアの国立大学によって設立され、一九七五年十一月にパプア・ニューギニアの国立公園へ移管改築されたものである。

五月三日は零時半起床。空はどんより曇っていて星は全然見えない。ヘッドランプをつけピウデ湖の南岸の悪路を巻いて登って行く。道は何とかついていてが凹んだ泥んこの道で滑り易い。

アウンデ湖の横を通る時ポーターが「右方に滑り落ちると湖水の中に墜落するから特に注意するよ

うに」と言う。

ポーターの足はあい変わらず早い。やがて夜が明け周囲が少しずつ識別出来るようになる。前方の山を右にトラバースする先頭のポーターが見える。道横の岩には白いペンキの標識が付けてあり、ルートははっきり分かる。

小雨が降ったり止んだり、ガスの去来が激しい。傘を持つ手がかじかんで来る。

道は次第に傾斜が急になってくると登り易い。周囲には高い岩峰が立っている。ガスが晴れ一つのピークが見え、その上に十字架のようなものがすかすかに見えた。ポーターはあれが頂上だと言う。やっと目的の山が見えて嬉しかった。一寸した岩場を登り切り、峠に達した。ガスの晴れ間から先刻の頂上の標識が直上に見える。どうも十字架の形ではない。

ルートの標識が適切に付けてあり、ルートを誤ることなく九時三十五分頂上(四五〇九)着。全員の登頂を待ち、揃ったところで記念写真を撮る。

この山は記録の上では一九六五年NHKの調査隊員二名が日本人としては初めて登頂し、その後個人的に登頂した人を除けば、旅行社の幹旋

り、山岳環境についての専門技術家、科学的技術熟練者などの登録を行う。これらを経験と実際知識の交換、共同作業、登山隊、諸会合などに提供し、世界的に地域共同体の教育に寄与する。

(3)機関誌
Mountain Research and Development 誌は国連大学と本会から共同出版され、ユネスコの援助も受ける。年四回刊行され、内容は自然科学と医学・建築・工学などの広範囲を包括する。一冊は約百ページで純学術的なものと応用研究のオリジナル論文の他、情報・評論、書評や会合・調査の報告を満載する。

(4)寄稿歓迎
寄稿は英語で公開されるが、現地語の別刷などの求めに応ずる用意もある。

今年もまた上高地山研で逢いましょう！

- (5)会員と会費
個人会員年会費二十五米ドル、学生会員十八米ドル、団体会員四十五米ドル、寄付会員千
- (6)本会設立の背景
本会の趣旨は一九七四年ミュンヘン、一九七六年ケンブリッジでのIGUの山岳生態部会で提唱され、その後国連大学の自然資源部会や、ユネスコあるいは国際自然資源保全連合などからも支持を受けた。
- (7)創立役員
会長 J・C・アイヴス(コロラド大、地球生態学) 副会長 C・ジェスト(国立パリ科学研究所、人類学) 及び H・ロフラー(ウィーン大、湖沼学) 氏他。
- (8)入会申込
Jack D. Ives: International Mountain Society
P.O. Box 348 Boulder, Colorado 80307 USA
右に申込書を請求されたい。
- 自然保護

で、かくも多人数が同時に登頂し得たことは前代未聞のことらしい。

十時五十分頂上をあとにする。登りには見えなかったが、途中アウンデ湖やピウデ湖が遙か下方に見えて来る。大小の滝もいくつかあった。アウンデ湖畔の道も大した崖ではない。五時二十分小屋に帰着。

五月四日の夜は小屋での最後の晩というわけでロソクを中心にポーター達と円陣を作って親睦会やる。ポーター達は歌を沢山知

っていて夜通しでも歌うという。「ハーハー・シックスシックス」という独特の哀調を帯びたユーモラスな歌が印象的だった。みんな好人物の純心、素朴なよい人達だ。裸足で歩くだけにその足の大きなことに一驚する。彼等の主食はカウカウ(Kaika)というさつま芋に似たもので、彼等はそれぞれが網の袋に入れて持参しており、これを煮たり焼いたりして食べている。これだけの食事でよくあれだけのエネルギーが出るものよ、と驚嘆の他はなかった。

五月五日小屋を出発。ケグルスの少し手前までマイクロパスが迎えに来ており、これに全部の荷物を積みチンブー河沿いに下る。途中ゲンボグルという部落の教会に立寄る。教会は病院をも兼ねており勤務員も多い。この神父さんや勤務員のための食糧を運んだり、勤務員を運ぶため、ケグルスグルに空港が出来た由。

翌六日午後ポーターモレスビーまで飛び、五月七日朝ニューギニア航空最後の便(赤字路線のため当日限り運行廃止となった)で福岡

メスナーに会いに

岡沢 祐吉

日本を発つ時、R・メスナーに会う予定はなかった。紹介文もたずさえず訪ねることを決めた時は、何か段取りをつけたらよいのかとしばらく考えこんでしまった。

山好きの、昨年アフリカで殉職したドイツ牧師が私に示した私の行動計画表には、インスブルックからグレーデナール、フィリネスタール、グシュニッツタールと訪ねるべき所がいろいろに書きこまれ、私の意志とはかわりなく、メスナーの住むサント・マグダレーナが組み入れられてあった。この計画表の添え書きで指示された通り、私はテレビア通りの本屋でポリグロット社刊の案内書を買求め、フィリネスタールへの道は、サント・マグダレーナへの道はと探した。

北イタリアのボルツァーノからトレントへ通じる鉄道の沿線からだとかかなり距離があり、はたして目的地まで乗物の便があるか詳しいことはわからない。ボルツァーノは大きい街だが、滞在日数が少ないとかなり無理だ。フィリネスタールに入るのにもっとも近い駅と、その周辺の宿も合せて探すが、クラウゼンというこれまで聞いたこともないような駅、街がこの条

件を満たすこともふさわしい所だと確め、翌日インスブルックを発った。メスナーがペーター・ハーペラーと無酸素でエベレストに立った数カ月後のことだった。

吹き曝しのクラウゼンのプラットフォームから、貨車入れ替え用の赤錆びた線路と雑草のはびこる路床を横切り、申しわけ程度の駅舎を横目に見て構内から抜ける。ここを通過する汽車は上下合せて一日二十本ほど。

十分ほど歩くと街の中心部に出る。メスナーという名の商店、イタリア山岳会の連絡所、丘の上には古い城、と案内書通りの小さな古い街である。この街からラインホルト・メスナーの住むサント・マグダレーナまで小さなバスの便があるが、一日僅か三本。朝十一時五十分の一番のバスで約四十分乗って、十四時十五分の最終バスでは戻らねばならない。走行距離十一キロを景色を楽しみながら歩いてみて、両側には製材所だの牧草地だのが入り混じる簡易舗装の道で、時折り排気ガスを残して去る自動車に出合うだけ。

サント・ピエトロまでバスで来るとガイスラーシュビッツの岩山が青空に聳えている筈だが、この日は小雨模様で、裾の部分がわずかに見えるだけだった。ガイスラーシュビッツにまで通じるサント・マグダレーナのならぬ丘は、冬期スキー場となるためか

「スポーツホテル・チロル」などの宿泊施設が二つほどあった。

小型乗用車を運転する子供連れの小母さんが、道を訊ねると親切にもメスナーの住む小高い丘の麓まで自動車に乗せてくれた。この地域の年寄りにはドイツ語に飢えていのか、ドイツ語で話しかけると事はスムーズに運ぶ。

メスナーの住む家は日本という農家の土蔵のようだ。ネパールから持ち帰ったらしい白い旗が何本かひらめき、異様な風であった。入口脇の牛小屋の跡らしいところで弟子らしい男が何かやっていて、「ラインホルトはいるか」と聞く。「上だ」と言う。

こうして何のおとがめもないまま、ドイツ軍人だった牧師から授かったドイツ式奇襲法は成功し、本丸ともいべきラインホルトの部屋へ通じる木の階段を昇ることができた。

あがりきったところから、たまたま部屋の戸が開け放されたままだったで、立ったまま書類に目を落すメスナーが目に入った。

「グリュース・ゴット」の言葉で目をあげたメスナーに、はつきりうらばいの子が窺えた。彼の飼っている小犬が突然の訪問者にありつけたの声をあげて吠えつく。クラウゼンから私が出した手紙に何の返事もなかったもので、とあらかじめ用意しておいた申し開きをする。五分間しか会えないと言

いながら徹夜で校正したという「エベレスト」の原稿を前に、何度かあくびをし、態度でもその事情をうたえる。日本山岳会の図書委員であることなどをつげ、彼の著書についての話をし、別れぎわ彼の差し出す骨ばった手を握った私は、エベレストでの彼の激しい登攀を想像し（すぐ後でナンガ・パルバートへ出かけた）行動第一という若者らしい強靱さを感じたのだが、同時にいつかこの会報に載った山崎（安）さんの図書紹介文で指摘を受けたように、若さ、あるいは蓄積の少なさを、一夜漬けて仕上げた「エベレスト」の部厚いドイツ語の原稿に感じないわけにいかなかった。

山里寿男個展開催

会期 十月一日(木)～七日(水)
会場 銀座松屋七階画廊

内容 アンデス、パタゴニア、槍・穂高

グリーンランドへ

行くには

デンマーク山岳会はこの数年來グリーンランド(以下Gと書く)のグループ・ツアーの世話をしていて一九七九年よりSASはG行飛行料金の値下げをし、グループ料金を廃止した。各自がG旅行を計画される参考になるかと思われる情報をできるだけ詳しく記すことにする。

一、飛行切符はSASまたは貴地の旅行業者に申込み。すくなくとも出立六カ月前に申込み。飛行機の収容人員は非常に制限されて

いる。

二、G行の必要書類は普通のパスポートだけでよいが、デンマークに入国の際ビザを必要とする国からはやはりGに行くにもビザが必要である。詳しくは貴地のデンマーク大使館に問合せをすること。

三、Gにおける登山または遠征隊は左記宛に特別申請をする、

(Grønlændsministeriet, Hæusergade 3, DK-1128 Copenhagen K, Denmark, 電話 01136925)。遠征に伴う危険度によって保険料金など一切をここで判断す。海外よりの旅行者もまたこの省に申請をするが保険をかける必要はない。申請は出

立六ヵ月より十二ヵ月くらい前にする。

四、Gの地図は左記にて購入す。
Geodætisk Institut, Rigsdagsgården 7, DK-1218, Copenhagen K, Denmark.

五、航空便は二十*までは無料だがそれ以上の時は出立前に船便でGに送る。Gへの出発港は Aalborg ではなく六月中旬までに到着するように送る。荷物受入期間及び費用などは K.G.H. Godskontoret, Grønlandshaven, DK-9000 Aalborg, Denmark, 電話 08157677 に尋ねる。

全部の荷物には受取人名の下に受取人名。

Angmagsalik

追悼

吉阪隆正氏を偲ぶ

私が早稲田の山岳部にいた頃、吉阪さんは一年先輩で私たちの面倒をみてくれた。その頃の山岳部には個人技をもって山に当るヨーロッパスタイルをとる者と、ヒマラヤなどの大きな山を目指す極地法をとる者との対立があり、私たちの山岳部も苦難の時代だった。どちらかというと山岳部の合宿にフランス人を連れてくるなどして、吉阪さんは早稲田らしきよりインナーナショナルな面があり、その考え方にはついていけない部分

があった。後年専門の分野で国際的に活躍された土台も、この頃にその下地があったのだらう。

お互い戦争に狩り出されたが、少尉の襟章をつけた吉阪さんに釜山の港で会った時はなつかしかった。そして亡くなる数年前、私は北アの東沢乗越と一緒に歩き、それがお会いした最後となった。こんなに早く逝かれるとは思ってもいなかった。

(百瀬 孝)

via Grønlandshaven
DK-9000 Aalborg Øst
Denmark.

と書く。

六、Gでかなりの種類の食料品を購入できるが、へんびな地方では限りがある。大体Gの食料品は住民のためであるから多人数の場合は自分達の食料の一部分でも持参する方がよい。

七、飛行場に到着してから、次の目的地までの交通機関の問題がある。

「西G」方面。

Sdr. Strømfjord または Narsarsuaq で乗船しそこより飛行機、ヘリコプターあるいは船で進む。通行時間及び料金等は

K.G.H. Trafikkontoret, Grønlandshaven, DK-9000 Aalborg, Denmark, 電話 08157677, に問合せ。

「南G」方面。

Narsarsuaq に到着しそこよりヘリコプターまたは沿岸航路船で Nanortalik に進む。そこより沿岸船かあるいはその地方の漁船をチャーターし目的地に行く。

「東G」方面。

Kulusuk 飛行発着所でヘリコプターに乗り Angmagsalik に行き、そこより沿岸船か漁船を雇う。

「北西G」方面。

最も興味深い困難な地区である。Mestersvig までの飛行機は月に一回であるが、そこより何処に進むにも舟が必要である。

しかしそれを見つければ至難である。海岸線にそって最も安く旅行するには沿岸船便による。しかしこれはたまにしか出港しないので相当待つ覚悟が必要である。おまけに人数の制限があり、希望する目的地に行けず、開拓地までしか連れてゆかない。また漁船は前もってたのめない。現地に着いてからたのむ。場所により料金は違うが普通五〜七人に対し Dkr. 5,000 で、五〜六時間の運航。但し去年の料金である。船の所有主と出発前に料金をきめる。また帰

りの飛行機やヘリコプターも間に合うように迎えたのまなければならない。飛行場に到着したら直ちに航空券の確認も大切である。

八、Kulusuk のような所では、さらに進むためのヘリコプターをチャーターできる。詳しくは Greenlandair Inc., Nyropsgade 26, DK-1602 Copenhagen V, Denmark, 電話 01112241 に問合せ。

九、Gは発展途上国であるため、アルコール類やビールは割当制の必要がある。従ってもしも旅行者に近付き酒類を入手しようとする者に対してはG人の間でこれを討議し投票によって割当を決議されることを覚えておいた。

十、デンマークより船でGに行けるが、これは八〜十二日間を要し、航空よりも費用は高い。

十一、Gに到着後、直ちに警察署に行先地と帰りの日を報告する。帰次第やはり届けるが、これは義務ではない。万一救援隊を必要とする場合の旅行者のためのものであるが、元来G救援隊は登山者救援のために組織されてはおらず人員も制限されていることを認識されたい。

十二、Sdr. Strømfjord 経由で東海岸に行く場合はそこに一泊しなければならぬ。出立できるまで宿泊と食事は無料である。西海岸の場合は Sdr. Strømfjord で宿泊、食事を支払う。しかし近く

のキャンプ場にテントを張ることもできる。ここから旅行を始めようとする場合、付近は軍用地であるから特別許可書が必要とする。出立の六〜十二ヵ月前に申請書をG省に提出する。

十三、遠征後は報告を下記に出すこととなっている。

DANISH MOUNTAIN CLUB, Expedition Committee, c/o Doffi Rotornik, Sneumadsvej la. DK-2730 Herlev, Denmark.

未踏の東壁―米国エン

レスト遠征―一九八一

一九八一年八月米国登山史上最強の遠征隊が米国アルパインクラブ後援の下にチベットの側からエベレスト東壁の登攀を開始する。外国隊に門戸を鎖していたチベットの政策のためこれまで殆んどがネパール側からの登山であり、全山の1/3を占める巨大な東壁は神祕のベールにすっぽり覆われていた。

一九二一年ハワード・ベリーの歴史的遠征以後この地を訪れた唯一の西欧人として米国の著名な登山家アンドリュー・ハーバードは中国政府の許可を得てこの秘境に入り、彼の偵察記録は昨年十一月部厚い報告書にまとめられた。それが一九八一年アメリカ隊計画の主体をなしている。

隊員は二十名、中国山岳会が後方活動を担当して協力する。今回

図書交換会に

本を御出品下さい

今年も例年通り恒例の図書交換会を十月二十四日(土曜日)午後二時ルームにて開催致します。

毎年多くの会員の協力を得て熱気に満ちた図書交換会を実施してきましたが、今年も皆様のご協力と御参加を得て成功させたいと思います。

どうぞお手元に重複本、不用本のある方は本、またはリストを九月末日までルーム内図書委員会宛お送り下さるようお願い致します。なお東京近郊で多数出品される場合には、図書委員の方が頂きに伺うことも出来ます。

出品する本に希望価格のある場合には本を出す時にリストを付けて下さい。値段を図書委員会に一任された時には、時価を考慮して適正な値段を付けます。なお売上金の二割を手数料として頂きます。

(図書委員会)

第二十四回紅葉会

聖、赤石の眺望

期日 11月14日・15日

お知らせ

会場 南アルプス 井川、勘行

券付近

募集人員 60名くらい

集合 11月14日12時、静岡駅南

口貸切バス専用駐車場

概要 14日 井川少年の家(泊)

15日 県民の森

会費 六五〇〇円

申込先 〒422清水市江尻東一ノ

二ノ二 和重屋 池上和男

(電話) 0543-66-6331

メ切 10月31日 会費到着をも

って申込確認とします。

なお、前もって申込まれる方を

途中の美女作りの温泉といわれ

る寸又峡温泉(民宿か大鉄山の

家で宿泊料四〇〇〇〜五五〇〇

円)へ山本が案内します。

(静岡支部)

自然保護講演会と

上高地自然保護集会

(1) 講演会——講師 井手貴夫氏

日時 10月12日(月)18時30分、

場所 山岳会ルーム

(2) 上高地自然保護集会

日時 10月24日(土)15時〜25日

(日)16時まで

場所 上高地ビジターセンター

費用 五千元(含山研宿泊料外)

申込先 〒180-03東久留米市滝

山6-2-10-314 小林 茂

電話 03-4723-6101 まで至急

(自然保護委員会)

のアメリカ隊は米中友好関係の発展を記念してサンフランシスコ市に対し中国側から登攀許可がおりたもので「生きている伝説の人」

エドモンド・ヒラリー卿がアドバ

イザーとして終始アメリカ隊と行

を共にする。隊長はリチャード・

ブラム、十五年におよぶヒマラヤ

旅行の経験者、本業は銀行家でダ

イアナ・ファインスタイン現サン

フランシスコ市長の夫君である。

登攀隊長ルー・ライハルトは、K

2、ダウラギリ、ナンダ・デビを

はじめアンデス、アルプス、アラ

スカ他数々の初登頂の榮譽を担う

登山歴二十年のベテラン。隊員に

はヒマラヤの高峰はもちろん、北

・南米、ロシア側天山山脈等に豊

かな経験を誇るJ・ロスクリー、

H・バーバー、G・ロー、D・レ

イド、前記A・ハーバードなど錚

々たる登山家が名を連ねている。

一行は八月七日アメリカを出

発、九日北京着、十四日には空路

ラサに入。八月十九日ラサ発、

トラック隊を編成して南下、二十

三日道路の最終地点カルタ着。こ

こから徒歩で付近の峰々を越え、

マロリーとベリーの開いたヒマラ

ヤで最も美しい谷を両側に望む標

高の高い峰を越えるルートを進み

カンシュン氷河に至る。

八月三十日東壁直下一七五〇〇

の地点にBC設営。エベレス

ト、マカルー、チョモランマ、ロ

ーツェに囲まれた円形演技場の只

中である。九月七日、二〇五〇〇

の南パットレスにCI設営。氷

河から最初の雪原に至る文字通り

の岩の壁である。同十五日、二二

五〇〇のクレバスの多い雪斜面

にCII設営。九月二十四日二番目

の雪原にCIII設営。垂直に流れ落

ちる氷河から東壁中央部を横切っ

て襲う雪崩から僅かに保護された

南寄りの地点である。

十月二日、二六五〇〇の地点

にCIV設営。大規模キャンプとし

ては最後の頂上への尾根に至

る大氷河の下に位置する。十月六

日、二八〇〇〇にCV設営。一

晩のビバークが可能なのだけの

の、既に周囲のどの峰よりも高

い。十月八日登頂予定。

カンシュン即ちエベレスト東壁

は世界最高最大の壁である。一万

以上にわたり垂直に落ちる氷

河、広大な氷原、雪崩の落下点、

数知れないアイスフォールとクレ

パス。その規模は人間の想像を絶

する。ベースキャンプ設営から登

頂態勢に入るまでに六週間を要す

るこの大規模な登山活動を支える

後方部隊も、また非常に複雑な活

動を要求されることである。

客観的に見て危険度は高い。百

を越える烈風、絶え間ない雪崩

の恐怖。この山の歴史は勝利と悲

劇に彩られている。エベレスト遠

のメンバーによって歴史に残る試

みになるであろう。

なお、この遠征は一時間の映画

にまとめられ、テレビでも放映が

予定されている。

後記

米国サンフランシスコ在住シカ

ゴ銀行の支店長で日本山岳会のメ

ンバーであり、また米国ヒマラヤ

ンクラブ基金の役員であるジョン

・デー君より送られた資料を抄訳

したものである。

(海外連絡委員会・吉田 宏)

報告

シャルマ氏歓迎会

海外連絡委員会

去る七月二十二日にルームでネ

パール親光省登山局長のシャルマ

氏歓迎会を開催した。生憎と四時頃

からの豪雨で交通止めも多く折角

出席の返事をされた会員も欠席さ

れたのは残念であった。

婦人懇談会有志の手作り料理も

交通止めで間に合わず、閉会の辞

のあとで到着したが、和やかな雰

囲気に帰る人もなく、一同二次会

のつもりで大いに舌鼓を打ち両国

間の交流に大いに役立ったと一同

自負して九時頃散会した。

ネパール大使館より大使代理も

出席され日本語でスピーチして大

いに楽しまれた。

なお来日中の印度女流登山家三

増した。

出席者 田口二郎、織内信彦、岡本龍行、田村俊介、佐々保雄、神崎忠男、菅沢豊蔵、山森欣一、菊地薫(担当委)、八木原昭明、斎藤かつら、小原晴子、伊丹紹泰、三谷純一郎、島海宣和、山口節子、小原俊、村木富士、西堀栄三郎、織田沢美知子、鈴木章、高橋美津栄、高木信子、松永康子、早川るり子、早川理奈子、鈴木郭之、清水春美、佐藤テル

(佐藤テル)

ルーム日誌

(56年7月)

1日(水) 婦人懇談会
2日(木) 総務財務委員会
4日(土) 医療委員会
6日(月) 部年報編集委員会
8日(水) 総務委員会
9日(木) ボゴダに

関する講演会

10日(金) 学生部東大・東洋大報告会

13日(月) 図書委員会

15日(水) 総務委員会 三水会

16日(木) フィールド委員会

17日(金) 総務委員会

19日(日) 委員会会議 新旧役員懇談会

22日(水) シェルマ氏歓迎会

23日(木) ボゴダ隊上智大合同会議

24日(金) インド女性によるヒマラヤトレッキング

28日(火) 説明会及び歓迎会 自然保護委員会

29日(水) ゴダ壮行会

30日(木) 山岳編集委員会

29日(水) 婦人懇談会

今月の来室者 498名

会員移動(7月)

訂正

一月号住変欄高遠祥八氏は高頭祥八です。

物故

四六二六 折元 秀穂(7・10) 退会

五九三〇 秋田しおみ 支部変更

四五九四 江越千代子(関西) 静岡岡へ

七三四三 篠崎 仁(関西) 谷

五六〇〇 久光(東海) 谷

会費未納の方は
お早く納入願います。

事務局

あとがき この号の編集作業は八月中頃のかかなり暑い時期に始めましたが、校了になった時はもう肌寒く、新聞には「探検部の学生北アルプスの赤牛岳で凍死」といった記事が載るようになりました。

この夏、長野県に在る間に豊科町の古原和美会員からは「日本登山医学研究会」で使った資料やプログラムのコピーを頂き、中房温泉の百瀬孝会員からは土橋莊三氏が寺島今朝一、小林喜作などと槍から東沢を経て中房に入ったことを記した、大正九年の宿帖の話を聞きました。チョモランマへ行った降旗義道会員は母校の山岳部OBの写真展を松本で開き、山岳部創設者の先生に感謝されたといひます。なお、土橋莊三氏のこととは後日山崎安治会員をわすれし何か書いて頂こうと思ひます。(〇)

昭和五十六年九月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五十四

サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 佐々保雄

編集代表 岡沢祐吉

電話東京(03)四四三三

振替口座東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

株式会社 技報堂